

上し、さらに主計寮においてこの予算書と当年の徭役収入総量とをにらみ合せたうえで、計画を実施することになっていた。この予算の作成を精密にさせるために各種目にわたって材料と人功とを微細に規定した積算規準が準備された。『延喜式』の木工寮の項は、この基準を示すものであった」（田辺・渡辺1968）。

- 38 ただし、ここでの「生瓦作工」数には、掘埴・打埴などの工数が含まれていることは、小林行雄が論証した（小林1964）。
- 39 ただし、井上満郎は、西賀茂鎮守庵瓦窯から、中心飾内に「近」「中」の文字を置いた唐草文軒平瓦が出土した事実に基づき、「官」は太政官、「近」は近衛府、「中」は中務省の省略形と考え、これらの文字瓦を、供給先を意味する帰属印と考えた（京都市文化財保護課1971）。しかし、「近」「中」は瓦範に彫り込んだ文字で、これを「官」字印と同じ次元では解釈できない。また、井上は、「官」字を太政官の省略形と考える根拠として、「この『官』を『私』に対する言葉と考えることも不可能ではないが、この瓦窯が官庁用のものと私用のものと両方を同時に生産したとは考えられず、また『私』に対するこの時代のふつうの対立概念は『公』であるから、私と対立する言葉とは考えにくい」と述べている。しかし、当時、「官」字印が太政官の意味とは全く無関係で実在している。すなわち、『厩牧令』によれば、官牛官馬は2歳になると「官」字烙印を髀に押すことになっていた。また、延暦15（796）年2月25日の「太政官符」（『類聚三代格』巻17）では、百姓私馬牛印を官印よりも小さくするように定めており、上記『厩牧令』の規定が空文でなかったことは確実である。この「官」字烙印は、太政官の官ではなく、官牛官馬などの常套句に見られる官であり、私に対立する概念であることは言うまでもない。また、この「官」字烙印は、私的な烙印と対立する帰属印であるが、認証印・検定印ならば、特に対立すべき印や概念は不用であるから、西賀茂鎮守庵瓦窯が官庁用と私用との両方の製品を作ったと考える必要もない。
- 40 「木工」は木工寮、「右坊」「右坊小」「右坊常」「右坊城」「左坊」は左右坊城使、「修」は修理職省略形であろう。

参考文献

- 浅香年木 1971 「様工集団とその長の性格」『日本古代手工業史の研究』第2章第3節
- 石田茂作 1930 『写経より見たる奈良朝仏教の研究』
- 石母田正 1963 「日本古代における分業の問題」『古代史講座』第9巻（後に『日本古代国家論』第1部、1973に収録）
- 伊藤玄三 1973 「重圓文系軒瓦の製作年代の下限」京都教育大学考古学研究会『史想』第16号
- 上原真人 1978 「中央官衙系瓦屋の製品にみる窠記号について」『京都大学埋蔵文化財調査報告』第1冊
- 同 1983 「恭仁宮文字瓦の年代」『文化財論叢一奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集一』
- 梅原末治 1923 「瓶原国分寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊
- 同 1943 『支那漢代紀年銘漆器図説』
- 梅原末治・西田直二郎 1934 『栗栖野瓦窯址調査報告』（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊）
- 岡藤良敬 1968 「造寺司木工について」竹内理三編『九州史研究』
- 加藤 孝 1979 「宮城県仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯出土品目録について」東北学院大学『東北文化研究所紀要』第10号
- 木内武男 1964 「日本古印の沿革」『日本の古印』
- 京都市文化財保護課 1971 「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971
- 京都府教育委員会 1977 「恭仁宮跡昭和51年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1977
- 同 1978 「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要」『同』1978

- 京都府教育委員会 1979 「恭仁宮跡昭和53年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1979
 同 1980 「恭仁宮跡昭和54年度発掘調査概要」『同』1980-I
 同 1981 「恭仁宮跡昭和55年度発掘調査概要」『同』1981-I
 同 1982 「恭仁宮跡昭和56年度発掘調査概要」『同』1982
 同 1983 「恭仁宮跡昭和57年度発掘調査概要」『同』1983
- 工藤雅樹 1968 「奈良時代に於ける陸奥国国府系瓦の展開」日本歴史考古学会『日本歴史考古学論叢』2
- 久保常晴 1967 「古瓦断章」『仏教考古学研究』第2章
- 黒田昇義 1938 『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事報告書』
 同 1944 「大和西ノ京の瓦大工橘氏」『大和志』第11巻第2号
- 古代学協会 1978 『西賀茂瓦窯跡』（『平安京跡研究調査報告』第4輯）
 古代学協会平安京調査本部 1977 『平安宮朝堂院永寧堂跡の発掘調査』
- 小林斗庵 1964 「中国の古印—日本古印の源流—」『日本の古印』
 小林行雄 1964 「造瓦所経営」『続古代の技術』第4章第4節
- 古窯跡研究会 1972 『仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書』（『古窯跡研究会研究報告』第1冊）
 同 1976 『陸奥国官窯跡群』II（『同』第4冊）
- 近藤喬一 1973 「平安時代の文字瓦について」『古代文化』第25巻第2・3号
- 島田貞彦 1935 『造瓦』
- 清水善三 1964 「造東大寺司における工人組織について」『仏教芸術』第55号
- 関口広次・手塚直樹 1975 「沖縄本島与那原町に残る造瓦技術について—平瓦桶巻造りを中心として—」『CIRCUM PACIFIC』2
- 高野芳宏・進藤秋輝・熊谷公男・渡辺伸行 1976 「多賀城の文字瓦（その1）」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』III
- 高野芳宏・熊谷公男 1978 「多賀城第II期の刻印文字瓦」同『同』V
- たなかしげひさ 1978 『奈良朝以前寺院址の研究』
- 田辺泰・渡辺保忠 1968 「建築生産」建築学大系編集委員会『改訂増補 建築学大系』第4巻—I、日本建築史、第1章第5節
- 中国科学院考古研究所洛陽工作隊 1973 「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』1973—4
- 角田文衛 1938 「山背国分寺」『国分寺の研究』上
- 直木孝次郎 1968 「様工に関する一考察」『奈良時代史の諸問題』第I章第6節
- 中尾正治・高橋美久二 1976 「京都紀年銘古瓦銘文集」『京都考古』第23号
- 奈良県教育委員会 1972 『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』
 同 1973 『国宝東大寺法華堂修理工事報告書』
- 福山敏男 1943 「奈良時代に於ける法華寺の造営」『日本建築史の研究』
- 藤沢一夫 1967 「造瓦技術の進展」『日本の考古学』VI、歴史時代（上）
- 平安博物館 1977 『平安京古瓦図録』
- 向日市史編さん委員会 1983 『向日市史』上巻
- 森 郁夫 1967 「山城国分寺址出土文字瓦」国学院大学考古学会『若木考古』第83号
 同 1972 『法隆寺文字瓦銘文集』
 同 1980 a 「平城宮の文字瓦」『研究論集』VI（『奈良国立文化財研究所学報』第38冊）
 同 1980 b 「東大寺法華堂の瓦」『南都仏教』第43・44号
- 洛陽博物館 1974 「洛陽隋唐宮城内的焼瓦窯」『考古』1974—4